

ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性

—生活・支援・過程に着目して—

西梅 幸治¹

(2011年10月3日受付, 2011年12月19日受理)

The Fundamental Peculiarities of the Empowerment Practice in Social Work
Focusing on the Aspects of Life, Support, and Process

Koji NISHIUME¹

(Received : October 3, 2011, Accepted : December 19, 2011)

要 旨

ソーシャルワークにおいて、中核となる理念として定着しているエンパワメント概念は、その方法論を確立することが求められている。しかしながらその課題の1つは、理論に基づき実践過程を展開することである。そこで本稿では、ソーシャルワークの基本的な実践原理である生活・支援・過程の側面から、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性について分析を行った。分析にあたっては、エンパワメントの原理・原則からカテゴリーを形成し、その特徴を整理した。そして理論的背景として基盤となるエコシステムと社会構成主義のperspectiveにより、その特徴を生活・支援・過程の側面から考察し、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性に関してperspectiveをとおして明らかにした。

キーワード：ソーシャルワーク, エンパワメント実践, 生活・支援・過程

Abstract

Recently, the empowerment in social work becomes established as a core concept, and it has been required to build its methodology. However, one of the issues is to build the empowerment practice process based on the theory and theoretical framework. Therefore, the purpose of this paper is primarily to analyze the fundamental peculiarities of the empowerment oriented social work from the aspects of social work basic practice principles, such as life, support and process. In the analysis, it was particularly used the principles of the empowerment practice. As a result, 8 categories have been abstracted from the principles of the empowerment practice, and arranged focusing on the aspects of social work essential concepts. Finally, it has become clear the basic peculiarities of the theory-based empowerment practice in social work, through the theoretical frameworks mainly consisted of ecosystems and constructionist perspectives.

Key Words : social work, empowerment practice, life/support/process

1 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・講師・博士(社会福祉学)
Welfare, University of Kochi, Lecturer (Ph.D.)

Department of Social Welfare, Faculty of Social

I. はじめに

ソーシャルワークにおけるエンパワメントは、その理念が広く実践に取り入れられ、様々な分野や領域で展開されてきている状況にある。しかし改めてその実践活動をふり返ると、理論に基づく実践展開となっているとはいい難い現状にあるのではないだろうか。支援科学としてのソーシャルワークにおいて、エンパワメントに基づく実践が確立するためには基礎となる理論的枠組み(perspective)、それに根ざした過程や方法が精緻化されなければならない。ソーシャルワークの草創期に立ち戻ると、1910年代にRichmond, M. E.がケースワークの科学的体系化を試みてソーシャルワークの専門職化が進展した¹。慈善からスタートした活動が彼女の試みにより、人間と環境をとらえて支援を展開する専門職としての道を歩むこととなったのである。

しかしながらその理論化に向けては、必ずしも人間と環境を一体的にとらえることが困難で、1970年代以降に一般システム理論や生態学などの人間と環境の両側面を視野に入れることができる理論が進展したことにより、ようやく専門職としての独自性を理論的にも確立することができつつある。このような動向のなかで、アフリカ系アメリカ人とソーシャルワーカーとの実践活動をとおしてエンパワメント概念は登場し、現在に至っている。

このエンパワメント実践も同様に、その依拠する理論的背景となる枠組み、さらには過程や方法については、未だ十分な整理がなされていないと考えられる。そこで本研究では、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の特性を分析・検討してみたい。具体的には、ソーシャルワークやエンパワメント実践に関連する文献を中心に、まずケースワークの歴史的動向からソーシャルワークの独自性である人間と環境の理論的視野が確立してきた経緯の概要をおさえ、今日のソーシャルワークの特性と実践原理を整理する。そして次にエンパワメント実践の理論的背景や特徴をおさえ

たうえで、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性を分析、さらには理論的枠組みによってその特性を考察する。それをとおして支援科学としてのソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性を理論的枠組みに基づき検討していきたいと考えている。

II. ソーシャルワークの特性

1. ケースワークの歴史的動向①

前述のとおりRichmond以来、ソーシャルワークは、その独自の焦点を人間と環境においてきた。その後、診断主義学派と機能主義学派の対立がみられるが、その代表的な論者も人間と環境を意識した研究成果を公表している。例えば前者では、Hollis, F.が人とその社会的・対人的環境、その相互交換を変容することに主眼をおいている²。その特徴としては、クライアントの過去から現在に至る生育歴、生活歴の分析をとおして、パーソナリティ構造を明らかにし、自我の強化を図るケースワーカー主導の治療的援助であった。

また後者については、Taft, J.やRobinson, V. P.,そしてSmalley, R. E.らが代表的な提唱者で、Rank, O.の意志心理学の考え方と人間観を基盤に、クライアントと社会一般の福祉を目指した援助を目標とした³。その特徴としては、クライアントの意志を引き出す時間をとおした関係の過程のなかで、機関の機能を活用する援助を展開することにあった。

しかし全体的には、診断主義学派に傾倒するなかで、個人の内面の病理に焦点をおいた人間的側面への援助が中心となっていた。そのようななかで両者の折衷を目指したPerlman, H.の問題解決アプローチについては、人間が社会的に機能する間に生じる問題の解決過程を重視した⁴。その援助では、クライアントに備わっている問題を解決するための能力であるワーカビリティ(workability)を活用し、問題の部分化をとおしてその解決を図っていく。加えてケースワーカーの援助が必要な問題の多くは、人間が何らかの地位にあるがゆえの

役割に絡む交互作用上の問題であるとし、役割概念の導入によって個人の内面の探究から人間と社会的状況の力動性に着目するように移行した。

そして1960年代に入り、当時のアメリカでは貧困問題、人種差別、ベトナム戦争などによる多様な社会問題や社会福祉問題が出現した。このような現実に対して、ケースワークのみではこれらの諸問題に対して十分に機能せず、多くの批判を受けることとなったのである。そしてソーシャルアクションを志向した展開と、そこでのアドヴォカシーや活動家としてのワーカーの役割が求められ、社会にアプローチする実践が見直されるようになった。改めて社会や環境にも視野を向けたソーシャルワークを展開することの意義が再確認されたといえる。

2. ケースワークの歴史的動向②

このような状況下では、これまでのケースワーク、グループワーク、コミュニティオーガニゼーションに代表される伝統的な3方法に分化したままの対応が次第に困難となった。そのためBartlett, H. M.による共通基盤の確立や、ソーシャルワークの包括・統合化が目指されるようになった。Bartlettは、価値・知識・調整活動をソーシャルワークの基盤におき、利用者の社会生活機能の改善・向上をその目標にした。包括・統合化については、システム論や生態学などの人間と環境の両側面を視野に入れることができる理論の登場が可能にしてきた。この理論によって、ソーシャルワークの視点は、再び人間と環境からなる生活に向けられることとなったのである。

人間と環境への視点はまず、例えばシステム論のなかでも社会システム論を援用したPincus, A.らの研究成果がある⁵。その成果では、ソーシャルワークが人間と社会環境との相互作用による問題を扱うことを明確にし、クライアント・システム、ターゲット・システム、チェンジ・エージェント・システム、アクション・システム、というワーカーの役割遂行のための基本的な4つのシス

テムを導き出している。さらに、生態学を援用したソーシャルワークの研究成果も登場した。例えば人間と環境の交互作用に着眼する生活モデルを提唱したGermain, C. B.らは、両者の適合に向けたレベルを改善すること、特に人間のニーズと環境の資源の適合を目指した実践を志向した⁶。そしてその実践は、個人、家族、グループ、ソーシャルネットワーク、コミュニティ、物理的環境、組織、行政と共に取り組んでいく8つの形態からなることを指摘している。

そして近年、これらの成果をふまえたエコシステム視座（ecosystems perspective）は、生活に着目する視点として共通理解を得ている。Meyer, C. H.によって定式化されたエコシステム視座は、人間と環境からなる生活を理解し、説明する方法として広く活用されている。このように、人間と環境というソーシャルワーク専門職としての独自の焦点は、ゆらぎながら歩みを進めてきたといえよう。このようなソーシャルワーク実践の傾向は、例えばWoodrow（1983）によって端的に表されている（図1参照）。すなわちソーシャルワークは、1980年代に入ってようやく理論的な背景をもち、その専門性である独自の視点を確立したといえることができる。

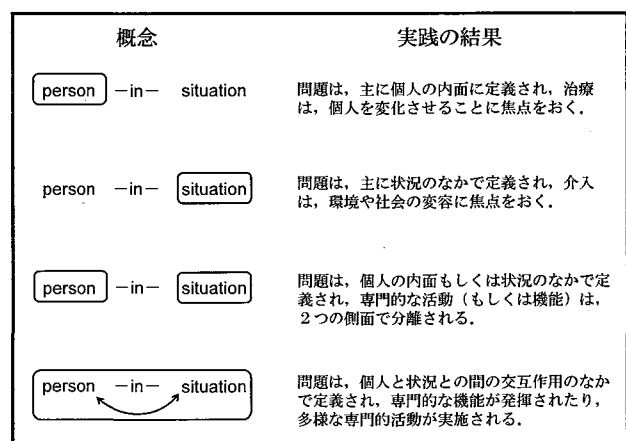


図1 人間と環境への焦点の変遷

3. ソーシャルワークの概念と特性

2001年に国際ソーシャルワーク学校連盟（IAS SW）と国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）

は、次のようなソーシャルワークの国際定義を承認した。「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人びとのエンパワメントと解放を促していく。ソーシャルワークは、人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入する。人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である」（国際ソーシャルワーク学校連盟ほか2009）。

この定義からもみられるように、人間と環境は、ソーシャルワークを形成する中心的な特性である。この理論的な背景としてのシステム論や生態学、そして両者の包括・統合化により生み出されたエコシステム視座に基づくソーシャルワークが今日、広く理解され共通理解を得ている科学的方法であるといえよう。そこでまず、わが国におけるエコシステム視座に基づくソーシャルワークの定義をみてみたい。わが国では、太田義弘の定義が精緻化されているため、それに基づいてソーシャルワークの概念と特性をみていきたい⁷⁾。

まず太田（2005）は、ソーシャルワークの定義を「ソーシャルワークとは、人間と環境からなる利用者固有の生活コスモスに立脚し、より豊かな社会生活の回復と実現への支援を目標に、独自の支援レパトリーの的確な活用による社会福祉諸サービスの提供と、利用者自らの課題解決への参加と協働を目指した支援活動の展開であり、さらに社会の発展と生活の変化に対応した制度としての社会福祉の維持、その諸条件の改善・向上へのフィードバック活動を包括・統合した生活支援方法の展開過程である」とまとめている。

加えてその定義を8つの特性に整理し、ソーシャルワーク固有の概念であることを解説している（太田2009）。その特性は、次の通りである。

- ①基本－利用者中心の人間と環境からなる固有な空間と時間や内容が構成する生活世界（コスモスcosmos）への視野と発想〔生活コスモス〕

- ②目的－より豊かな社会生活の回復・維持・向上さらに生活コスモスでの自己実現を目標〔自己実現〕

- ③体系－利用者の生活ニーズに焦点化した支援レパトリーの固有な構成と的確な活用〔レパトリー活用〕

- ④焦点－利用者と環境への視野から社会福祉諸サービスの提供を通じた具体的課題の解決〔課題解決〕

- ⑤展開－利用者とソーシャルワーカーの参加と協働を可能にする支援ツールの活用と支援への科学的方法の展開〔参加・協働〕

- ⑥方法－利用者と環境からなる生活コスモスがもつ自己統制力や社会的自律性の育成と強化への支援〔育成・支援〕

- ⑦特性－支援サービスと環境調整からなるフィードバック活動が循環する包括・統合的な支援活動〔フィードバック〕

- ⑧過程－実践の専門性と科学性を構成する支援局面の深化と展開、実存的参加の推進と成果の循環する過程〔過程展開〕

さらにこの特性を表わす中心的な概念であり、基本となる実践原理として太田（2008）は3つを挙げ、ソーシャルワークの特性を「生活支援過程」としてまとめることができると指摘している。この3つの概念は、まず「生活」について人間理解への価値意識と姿勢から、その生活を人間と環境さらに時間と空間から独特な経験や事実で構成されるその人固有の世界（cosmos）として理解する意図をもつことが指摘されている。次に「支援」については、利用者自身とその特殊な生活状況理解に立脚した方法を重視した概念であるとし、利用者の生活コスモスで自らのもつ問題解決能力を育み自己実現へと進展する過程に、支援者として参加・協働する姿勢と態度、方法と技術を示すことが述べられている。そして最後に「過程」については、生活を焦点にした参加と協働からなる利用者と支援者との支援関係が、科学的・専門的な

方法にて計画的に推進されていくこととして理解し、その過程を重視することが強調されている。

Ⅲ. エンパワメント実践の基本特性

1. エンパワメント概念と理論的背景

このようなソーシャルワークの生活支援過程という特性をふまえ、次にはそのソーシャルワークにおいてエンパワメント実践がどのような位置づけにあるのかを検討してみたい。

筆者はこれまでに、エンパワメント概念の特徴を整理してきた（西梅2010）。それによると、まずエンパワメントは、利用者独自の活動と、それを支えるソーシャルワーカーとの支援から構成されている実践概念である。そしてあらゆる利用者システムの自己肯定感・効力感と生活の質向上を目標に、ストレングスやパワーの増強をとおしたミクロからマクロまでの生活コントロール過程とそれへの支援を特徴にもつことが理解できた。

このエンパワメント概念は、前述のソーシャルワークの専門性を確立してきた理論的背景であるシステム論や生態学、エコシステム視座を具体化する方法であることが期待されている（例えば Germain2008；小松1995；齊藤1997；太田1999）。太田（1999）もソーシャルワークの視野をエコシステム視座としながら、具体的な状況改善へのアプローチについて、利用者本位を出発点とし、社会的自律性competenceを大前提にした人格と人権の尊重からなる賢いconsumerとしての利用者、行動する利用者のempowermentと理解し、専門家は支援過程に参加するcollaboratorやpartnerとして理解する必要性を指摘している。

また一方では、エンパワメントの理論的背景として、システム論や生態学、そしてエコシステム視座が位置づくという指摘がなされている（Mileyら2007；Wise2005；Kirst-Ashman 2000；Lee2001）。加えて近年の動向として、エンパワメント概念へのポストモダンの影響がみられ、その実践の理論的背景として社会構成主義が位置づくことも指摘されている（Mileyら2007；Adams

2008）。このことをふまえて、エンパワメントの理論的背景としてのperspectiveの基盤にエコシステム視座と社会構成主義的見解（constructionist perspective）があることを指摘し、その特性について検討してきた（西梅2010）。

以上を考慮すると、ソーシャルワークにおけるエンパワメント概念は、エコシステム視座や社会構成主義的見解を基盤とした理論的背景となる枠組みをもつ実践過程であり、その過程で展開される実践方法である。そしてソーシャルワークにおける1つのアプローチであると考えることができるだろう。

2. エンパワメントの原理・原則

ソーシャルワークにおけるエンパワメントの実践過程を深化していくためには、その特徴をふまえてさらにエンパワメント実践がどのように展開されているのかをまず把握していく必要がある。そこでここでは、エンパワメントの原理や原則が記述されている先行研究を参照しながら、さらなる具体化を進めてみたい。

原理や原則から検討していく理由は、例えば Lee（2001：59）が原理について、アプローチの構造を決定し、ソーシャルワーカーに開かれた行動の選択範囲を定める制約を含んでいることを指摘している。特にエンパワメントに関する原理については、抑圧の状況について考え、関係を形成し、批判的思考や習慣、意識的高揚のようなエンパワメントへの支援過程を扱う際に私たちを導いてくれることを同時に述べているからである。

このような原理や原則は、多くの研究者によって指摘されているが、そのなかで主要なものを次の表1の通り抽出した。このエンパワメントの原理・原則をとおして、その実践の基本特性を検討していきたい。

表1 エンパワメントの原理・原則

| 文献 | 原理・原則・指針・信条 | 具体的な内容 |
|---------------------|--------------------------------|--|
| Simon (1994) | エンパワメントによるソーシャルワーク実践のための指針 | ①利用者やコミュニティ構成員から表現された好みや、明らかとなったニーズに対応するプログラムを形成する。 ②プログラムとサービスが最大限に、利用者とコミュニティにとって便利でアクセスしやすいことを確かめる。 ③自身だけでなく、利用者自身に問題解決への心がけについて導く。 ④利用者とコミュニティのストレング스에 着目し、増やしていく。 ⑤利用者と利用者グループの要求や問題、ニーズの独特な構成に応じてインタベンションに工夫を重ねる。得る方法に固執することを控える。 ⑥リーダーシップの開発を実践や政策決定の一環の優先事項にする。 ⑦エンパワメントに向けて、相応な時間をかけて忍耐強く継続的な努力を行う。 ⑧現在の取り組みの中でソーシャルワーカー自身のパワーやパワーレスについて考慮する。 ⑨全般的利益に向けてローカルな知識を活用する。 |
| Staples (1999) | エンパワメントに向けた実践原理 | ①個人やグループとの支援関係構築のためには、協働、信頼、パワーの共有が基盤となる。相互作用は、誠実さ、相互の尊重、開かれたコミュニケーション、非公式さによって特徴づけられるべきである。 ②利用者が個人的な問題と制度上のパワー関係との関連に気づくことができるように支援する。 ③利用者が変化の過程に積極的に参加し、支援関係の中で個人的なパワーの感覚を経験できるように支援する。自己決定や行動を起こすための機会を最大にする。もし利用者が自身のために行動できるならば、何かをするのではなく、必要に応じてモデルになる。 ④利用者が自己肯定感や尊敬、自信、効力感。そしてコントロールの感覚を含む自己イメージを強化するように支援する。 ⑤利用者と共に新しい知識や技術を発達させるように取り組む。成長の機会を最大にするために鼓舞する。譲歩することなく成長するように支援する。 ⑥利用者が実在する成果（物質的な資源、プログラムやサービスへのアクセス、個人的な向上や制度的変化の機会）や明らかな利益（社会関係、孤立化の減少、公や仲間承認、コミュニティの構築、グループの結果）を上げられるように支援する。 |
| Lee (2001) | エンパワメント・アプローチの原理 | ①すべての抑圧は、生活に有害であり、ソーシャルワーカーと利用者によって挑戦されるべきものである。 ②ソーシャルワーカーは、抑圧の状況について全体的な視点を維持するべきである。 ③人々は自身をエンパワーする。ソーシャルワーカーは、それを支援するべきである。 ④同じ立場を共有している人々は、相互にエンパワメントを達成する必要がある。 ⑤ソーシャルワーカーは、利用者と相互に互恵的な関係を確立するべきである。 ⑥ソーシャルワーカーは、利用者が自身の言葉で語るように助ますべきである。 ⑦ソーシャルワーカーは、犠牲者ではなく克服していく者としての人に焦点をあてる。 ⑧ソーシャルワーカーは、社会変革への関心を維持するべきである。 |
| Adams (2003) | 実践におけるエンパワメントの原則 | ①実践家は、様々な形態の抑圧に対抗する人々と共にエンパワメントアプローチの発展に専心し続ける必要がある。 ②実践家と利用者は、エンパワメント過程を共有するべきである。その過程には少なくともプランニング、共に活動すること、自主的な活動、そして終了後の評価が含まれる。 ③利用者は、自分自身の権利を擁護する必要がある。可能な限り自分自身をエンパワメントしていく必要がある。 ④実践家は、利用者が自身の経験や知識、そして希望を表現することを促し、可能な限り利用者自身の選択に応じて行動するように促すべきである。 ⑤実践家と利用者は、エンパワメントを達成するために共に取り組む必要がある。 ⑥実践家と利用者は、例えば個人、グループ、組織などの異なる領域との連携を、可能な限り活用する必要がある。 ⑦実践家は、利用者が環境に順応するよりも、環境を変えエンパワメントしていくことができるように関わっていくべきである。 |
| Dubois (2008) | ソーシャルワーク専門職の信条 | ①個人や集団自身の問題解決や対処する能力をより効果的に用いてエンパワーする。 ②社会的、経済的な政策の発展や個人や社会に生じる問題の予防に関して、積極的な姿勢で支援する。 ③ソーシャルワーク実践のすべての側面専門職としての誠実さを遵守する。 ④社会生活機能を促進し、生活の質を高めるために人々と社会的な資源との間のつながりを築く。 ⑤制度的な資源システムのなかの協力的なネットワークを発展させる。 ⑥保健福祉サービスへのニーズを満たすための制度的な資源システムの応答性を促進する。 ⑦社会正義と社会参加に関するすべての人々の平等を促進する。 ⑧研究と評価をとおしてソーシャルワーク専門職に関わる知識の発展に貢献する。 ⑨問題や資源が生み出される制度的システムの情報交換を促進する。 ⑩多様性の理解と民族性に配慮し、性別のないソーシャルワーク実践をとおしてコミュニケーションを高める。 ⑪問題の予防や解決のために教育的な戦略を利用する。 ⑫人間に関する問題や問題の解決策について世界的な視野を持つ。 |
| 安梅 (2004) | ケアにおけるエンパワメントの原則 | ①目標を当事者が選択する。 ②主導権と決定権を当事者が持つ。 ③問題点と解決策を当事者が考える。 ④新たな学びと、より力をつける機会として当事者が失敗や成功を分析する。 ⑤行動変容のために内的な強化因子を当事者と専門職の両方で発見し、それを増進する。 ⑥問題解決の過程に当事者の参加を促進し、個人の責任を高める。 ⑦問題解決の過程を支えるネットワークと資源を充実させる。 ⑧当事者のウェルビーイングに対する意欲を高める。 |
| Manning (=2000) | 精神障害者に対応するエンパワメントの実践原則 | 態度 ①ラベルもしくは診断をつけるのではなく、対応する精神障害者について考え、交流する。 ②自己決定に対する個人の権利を尊重する。 ③生活の質と環境面の要因を考慮に入れながら、「その人全体」に責任を果たす。 ④アセスメントと実践のために、欠損モデルよりもむしろストレングス視点に焦点を合わせる。 ⑤利用者たちが関係に持ち込んでくる多様な技能や知識を尊重する。「専門家」（エキスパート）であることを捨て去る。 ⑥利用者が内面にもっている自分の生活を学び、方向づけようとする意欲を信用する。 ⑦利用者がわれわれに対し、他の利用者に対し、機関や地域社会に対し貢献する能力と権利をもちいることを尊重する。 ⑧精神障害者の個性を認め、各人の独自の特性、価値、ニーズを尊重する。 関係 ①パートナーシップモデルに従って実践する。利用者との関係において、「支配」というよりもむしろ、「共有・共存」していく方を発達させる。 ②関係を確立し、成長させていく過程のために時間を認める。関係は時間によって限定されるものでなく、進行していくものとみなす。 ③専門家としての役割を重要視しない。誠実で、自然体で、真正であれ。 ④利用者と実践家が積極的に参加して取り組んでいく。 ⑤指導力を共有する。利用者が関係に持ち込む指導力を尊重する。 ソーシャルワークの役割 ①利用者が抱えている目標と価値に焦点をのいたケアに関するクライアント主導モデルを発展させる。 ②失われた文化、歴史、アイデンティティを取り戻すため、役割、積極的参加、コミュニティを通して進捗を築き上げることを重視する。 ③技能、知識、柔軟な思考を確立するのに役立つような興味のある活動のための機会を発展させる。 ④利用者が環境に順応するというよりもむしろ、自分自身の環境を変えていく能力を高める。 ⑤利用者が危険を冒し、決断を下し、そこから学んでいくようにさせる。 ⑥自己効力感を増進させる情報、教育、技能形成を重視する。 ⑦利用者と家族員が関係において、また組織体のなかで意志決定する役割をとらせるようにする。 |
| Andrus (=2000) | ホームレスの人々に対応して用いられるエンパワメントの実践原則 | ①クライアントの直接的なニーズに応じる。 ②問題に関するクライアントの考えを受け入れる。 ③統制するパワーもしくは権限を共有する。 ④資源や技能についての教育を行う。 ⑤協働で取り組んでいく関係を創り出す。 ⑥相互支援グループを活用する。 ⑦意識高揚を図る。 ⑧組織としての発達に参加する。 |
| GlenMaye (=2000) | 女性に対するエンパワメント実践の付加的な原則 | ①実践家自身が個人的および政治的な意識高揚の過程を経験しながら、女性の人生への抑圧の影響を理解すること。 ②女性が自分自身と自らの現実を信じ、自分の現実を語ることで安全で、信頼でき、支持される環境を他の女性と共に創り出すこと。 ③自分自身がもっている能力、強さ、価値を経験する具体的な機会を与えられるべきである。 ④自主性と自己決定を基本としながら女性は自分自身と社会を変えるために協働する。そのために実践家は個人的な問題を個人的に解決するために取り組むよりも、女性を團結させて社会的変革に向けて女性と取り組む方法を問いださなければならない。 ⑤教育者、支持者、代弁者、活動家、選択を明確にする者、具体的な経験の促進者、エンパワメントのモデルのような役割を果たす。 |
| Wise (2005) | 家族とのエンパワメント実践における7つの原理 | ①抑圧的な要因を確立し減少させると同時にストレングスや資源を確立し形成する。 ②民族性、年齢、ジェンダー、性的指向、能力、言語、地域や宗教上の信条の発達段階、社会経済的階層、地理的背景、教育レベル、家族構造の違いを支援するために、全ての利用者家族と相互に多様な文化への尊重した関係を築く。 ③個人的、対人的、コミュニティのニーズや、3つのレベルの相互作用によるニーズ、それらのニーズの家族システムへの影響を認める。 ④十分な資源によって、家族構成員は自身をエンパワーする能力を持ち、自身の選択やゴールに応じて物事を起こすための能力、家族の福利への感覚を持つことを前提として取り組む。 ⑤家族としてのエンパワメントのために、家族構成員がお互い他家族の支援、そしてコミュニティの組織化が必要であることを認識する。 ⑥必要に応じて自己内省と評価に開かれ、エンパワメントに向けた支援関係を明確化しながら、利用者家族とワーカーとの間の異なるパワーを対等にするために、パワーを共有する関係を構築し維持する。 ⑦家族構成員を支援、援助し、以上の原理を反映するような役割をとおして家族に貢献する。 |

3. 原理・原則にみる基本特性

エンパワメントの原理・原則の特性をみていくにあたり、原理・原則とそれが示されている先行研究の文脈をもとにカテゴリー化を行った。具体的には、各原理・原則を特徴ある要素ごとにコード化し、その内容を類似性に添って抽象度を高め、カテゴリー化した。その際には、ソーシャルワークの実践原理である生活・支援・過程を意識し、基本特性を抽出できるように分析を行った。その理由は、エンパワメント実践がソーシャルワークの1アプローチであり、その側面から諸特性を理解することで、ソーシャルワークにおける位置づけと独自性が明らかとなると考えたからである。分析の結果、表2のように8つのカテゴリーが抽出できた。ここでは、その解説を基本特性ごとにしていきたい。その際にカテゴリーについては【】、サブカテゴリーを[]、コードを<>、原理・原則を「」として示している。なお原理・原則については、表1を参考に原理・原則を提起した人物名と原則に付加されている番号（ex.「Simon①」）で示すこととする⁸。

（1）生活

生活に関するカテゴリーとしては、①【個人から社会までのニーズを見通し、生活全体に関わる】②【利用者の内省を通じた現実理解を尊重し、決定を促す】が抽出できた。まず①については「多様性に配慮する」「抑圧の影響を理解し対抗する」「個人的、対人的、コミュニティ、そして社会のニーズの影響を考慮して対応する」「環境を考慮して生活全体に関わる」から構成されている。例えば「Lee①」で指摘されているように、抑圧への理解を深めることが重視されている。そして「Adams⑦」にみられるように、利用者の生活に関して環境を含めてとらえていることが分かる。また「Wise③」で述べられているように、利用者について個人だけでなく、コミュニティや社会までも含めたシステムとしてとらえ、そのニーズを考慮して環境を改善することにより、利用者生活の変容を図る必要性が理解できる。

次に②については「利用者自身の現実へのとらえ方を尊重し、認識を信頼できるように促す」「利用者自身が内省を深め分析・評価を行う」「利用者が自身の責任で決定できるように尊重する」から形成されている。例えば「Lee⑥」「Andrus②」などにみられるように、ソーシャルワーカーが利用者の現実を知るところから始め、利用者自身の言葉で語ることができるように励ましていくことの必要性が指摘されている。そして「安梅④」「Wise⑥」のように、生活問題や解決策に関する利用者自身の内省を重視する。そしてどのように生活問題を解決する支援を進めていくかや、今後

表2 原理・原則にみる3つの特性

| 基本特性 | カテゴリー | サブカテゴリー |
|--------|-----------------------------------|---|
| (1) 生活 | 個人から社会までのニーズを見通し、生活全体に関わる。 | 多様性に配慮する。 抑圧の影響を理解し対抗する。 個人的、対人的、コミュニティ、そして社会のニーズの影響を考慮して対応する。 環境を考慮して生活全体に関わる。 |
| | 利用者の内省を通じた現実理解を尊重し、決定を促す。 | 利用者自身の現実へのとらえ方を尊重し、認識を信頼できるように促す。 利用者自身が内省を深め分析・評価を行う。 利用者が自身の責任で決定できるように尊重する。 |
| (2) 支援 | 利用者に対して尊重・貢献する姿勢で取り組む。 | 多様性を尊重した関係を築く。 誠実さをとおして利用者に貢献する。 教育的な役割により利用者のモデルとなる。 |
| | 利用者主導でワーカーの支援を統制する。 | 利用者主導で専門家としての役割を重視しない。 利用者に応じてワーカーの支援方法を統制する。 |
| | パートナーシップ関係によりパワーを共有し、協働する。 | 相互に尊重し、互恵的な関係を確立する。 利用者の自主性・決定を基本とした協働関係を創り出す。 パートナーシップによる関係を明確化し実践する。 パワーを共有する支援関係を構築する。 |
| (3) 過程 | 利用者の成長・変容に向けて支援過程をとらえて協働する。 | 時間を通じた成長・変容過程を考慮して取り組む。 支援過程をとらえて成果を上げるように共に取り組む。 ワーカー自身のエンパワメントを考慮し、専門職の発展に貢献する。 |
| | 利用者がストレングスに着目し自身と環境を変えていくために行動する。 | 利用者が自身と環境を変えていくために行動する。 利用者自身が意欲的に問題や目標について考えられるように関わる。 利用者のストレングスに焦点化し、行動を変容する。 |
| | | 社会資源や機会を通じて社会生活機能を高め、行動を起こす。 |
| | 利用者個々の問題から社会変革までを視野に入れて実践する。 | 利用者個々の問題を社会正義との関連で考え支援する。 知識や能力を形成するための機会をつくる。 相互支援グループを形成・活用する。 連携やネットワークを通して資源の充実やアクセスを向上する。 組織やコミュニティの発達を促進する。 制度改善や社会変革に向けて実践する。 |

の生活については、「安梅⑥」「Manning態度②」などにみられるように、利用者自身の選択や決定の重視を理解することができる。

このように利用者の生活を考えるにあたり、抑圧への理解、人間と環境への視野、利用者自身の現実の理解と決定の重視、ミクロからマクロまでのニーズ把握を特徴としていることが理解できよう。

(2) 支援

支援に関するカテゴリーとしては、①【利用者に対して尊重・貢献する姿勢で取り組む】②【利用者主導でワーカーの支援を統制する】③【パートナーシップ関係によりパワーを共有し、協働する】を抽出することができた。まず①については「多様性を尊重した関係を築く」「誠実さをおして利用者に貢献する」「教育的な役割により利用者のモデルとなる」から構成されている。具体的にみていくと、多様性を尊重した関係について「Wise②」などにみられるように、民族性、年齢、ジェンダー、性的指向、能力、言語、地域や宗教上の信条の発達段階、社会経済的階層、地理的背景、教育レベル、家族構造の違いなど、生活上のニーズを抱えるあらゆる利用者に対応するための多様性を考慮した関係構築の重要性が指摘されている。加えて「Dubois③」にみられるようなソーシャルワーカーの誠実さや「Staples③」「Dubois⑪」などで指摘されている教育的な役割をもちながら利用者と関係を築き、支援を行う姿勢の必要性が理解できる。

次に②については「利用者主導で専門家としての役割を重視しない」「利用者に応じてワーカーの支援方法を統制する」から形成されている。例えば専門家としての役割を重視しないことに関しては「Manning関係③」などによって挙げられている。そして利用者主導の実践展開を目標とするため、そこでのソーシャルワーカーは、側面的な支援者として関係を築く。その関係で行われる支援については「Simon⑤」にみられるように、

得意な支援方法に固執するのではなく、利用者のニーズに応じてインターベンションを工夫することが求められていることが分かる。

最後に③については「相互に尊重し、互恵的な関係を確立する」「利用者の自主性・決定を基本とした協働関係を創り出す」「パートナーシップによる関係を明確化し実践する」「パワーを共有する支援関係を構築する」を収束した結果のカテゴリーである。利用者とソーシャルワーカーの相互尊重や互恵性に関しては「Staples①」「Lee⑤」などに指摘されている。そして「Andrus⑤」「GlenMaye④」で記述されているように、利用者の自主性を基本として協働し、それを目標にソーシャルワーカーが関係構築を進めていく必要性が理解できる。またそこでは「Staples①」「Andrus③」で述べられているように、利用者とソーシャルワーカー各自が保持するパワーを共有できるような関係づくりも求められているのである。

このように利用者のエンパワメントを志向した支援については、利用者とソーシャルワーカーの関係性を考慮し、協働関係を構築していくことを重視していることが理解できよう。

(3) 過程

過程に関するカテゴリーとしては、①【利用者の成長・変容に向けて支援過程をとおして協働する】②【利用者がストレングスに着目し自身と環境を変えていくために行動する】③【利用者個々の問題から社会変革までを視野に入れて実践する】を形成することができた。まず①については「時間を通じた成長・変容過程を考慮して取り組む」「支援過程をとおして成果を上げるように共に取り組む」「ワーカー自身のエンパワメントを考慮し、専門職の発展に貢献する」から構成されている。具体的には「Simon⑦」「Staples⑤」にみられるように、利用者の成長や変容を目指すことが認識されている。そしてそれを「Staples⑥」「Adams②」などで示されているように、支援過程をとおして達成できるように協働で展開するこ

とが期待されている。一方その過程では「Dubois⑧」などが指摘するように、ソーシャルワーカーの力量をふまえること、さらにはソーシャルワークやワーカーの発展・成長も視野に入れることが重視されている。

次に②については「利用者が自身と環境を変えていくために行動する」「利用者自身が意欲的に問題や目標について考えられるように関わる」「利用者のストレング스에 焦点化し、行動を変容する」「社会資源や機会を通じて社会生活機能を高め、行動を起こす」から形成されている。例えば「Adams③」「Adams④」「Manning役割④」などで示されているように、利用者自身とその環境を変えていくために行動を起こすことの重要性が指摘されている。その際には「安梅③」などで指摘されているような、利用者自身が問題や解決策について考えることや「Staples④」「Wise①」などにみられるようなストレング스에 焦点化すること、そして「Staples③」「Dubois④」などに記述されているように社会生活機能を高めるための社会資源や機会を通じて、行動変容を図っていく過程展開が求められている。

最後に③については「利用者個々の問題を社会正義との関連で考え支援する」「知識や能力を形成するための機会をつくる」「相互支援グループを形成・活用する」「連携やネットワークを通して資源の充実やアクセスを向上する」「組織やコミュニティの発達を促進する」「制度改善や社会変革に向けて実践する」を収束した結果である。具体的にはまず「Staples②」「Dubois⑦」などにみられるように利用者個々の問題解決だけでなく、社会との関連で考え、社会正義を促進することが期待されている。このミクロからマクロまでの実践過程では「Wise④」などに指摘されている利用者個々の能力形成や「Lee④」などにみられる相互支援グループの形成・活用、特に「Andrus⑧」「Wise⑤」に記述されている組織やコミュニティの発達、そしてそれらをとおして「Dubois⑥」「GlenMaye④」などにみられるよう

に、制度改善や社会変革を図っていくことが求められているといえる。

このようにみていくとエンパワメント実践過程は、利用者自身のストレング스를活かした行動変容による成長・変容の過程である。そして利用者とソーシャルワーカーの協働をとおした個々の問題から社会変革までを含めたミクロからマクロまでの実践過程であることが理解できるだろう。

IV. perspectiveによる基本特性の考察

1. エンパワメント実践で把握する生活概念

ソーシャルワークは、利用者の個別で多様な生活を把握し、支援を展開する過程が中心的な特性である。そのため、生活支援過程というソーシャルワークとして独自に構成される方法的概念をとおして、エンパワメント実践を検討することでその基本的で独自な特性を理解できる。その検討にあたってこれまでは、原理・原則をふまえてエンパワメント実践に独自な生活支援過程をとらえてきた。それはソーシャルワークにおけるエンパワメント実践という1アプローチの基本特性といえる。

その特性をふまえて最後に、エンパワメント実践を科学的に考察し、理論的展開を志向していきたい。ここでは理論的背景として理解できる実践枠組み、すなわちperspectiveをとおして深めてみたい。それは前述のようにエコシステムと社会構成主義を理論的枠組みとしてふまえるということであるが、それをとおしてソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性について科学的な考察が可能になるといえよう。すなわち支援科学としてのエンパワメント実践の特性を理解できるのである。

そこでここではまず、エンパワメント実践における生活概念の特性についてみていきたい。まずエンパワメントの原理・原則に示されているように、抑圧への理解、人間と環境への視野、利用者自身の現実の理解と決定の重視、ミクロからマクロまでのニーズ把握など、利用者と環境の交互作

用をみながら生活をとらえ、そこでの抑圧を含めた問題状況や社会資源を包含した利用者のストレスを把握し、生活の質を高める実践が求められている。原理・原則の特性である【個人から社会までのニーズを見通し、生活全体に関わる】にみられるように、生活をトータルに把握するためには、エコシステム視座がその科学的基盤となると考えられる。エコシステム視座では、生活状況を人間と環境の視野からトータルに把握するため、システム思考より、構造と機能を抽出して記述・説明を行う。この場合、まず生活を人間と環境の枠組みでとらえること、そして生活状況の構成要素とその関係性、そこから生じる機能を詳細に理解することができる。例えばエコマップのような図式でも表現されるように、状況をとらえ説明することにこの視座は優れているといえる。

しかしそのような生活の実像理解を誰の視点で、どのように解釈するのかを視野に入れると、この視座は十分な説明を与えてくれない。すなわち原理・原則に示されている【利用者の内省を通した現実理解を尊重し、決定を促す】ことに十分な配慮がなされていない。これまで人間と環境の相互作用に関する定義や意味づけは、特にソーシャルワーカーによる専門的判断に委ねられてきた。その結果、例えばソーシャルワーカーの専門的判断である見立ては、利用者の問題認識と大きく異なり、支援効果に反映しない、もしくは支援につながらない場合もあった。加えて今日の価値観の多様化や社会・文化の多様性が尊重されるポストモダンの状況下では、ソーシャルワーカーの評価が必ずしも正しいといえず、それ自体が利用者のパワーレスを生み出すことにも注意を払うことがエンパワメント実践では必要となる。

このようなソーシャルワークの専門性批判や、利用者認識の重視は、社会構成主義の立場からの警鐘である。例えば原理・原則にみられる利用者のとらえ方を受け入れることや自らの現実や真実を語ること、利用者自身に尋ねること、多様な文化への尊重など、利用者の知を活かすエンパワメ

ント実践では、この社会構成主義的見解という科学的基盤による特徴を同時に重視する必要がある。

この立場からは、生活状況や問題を規定するうえでソーシャルワーカーだけではなく、利用者自身の意味づけを重視したり、両者の差異に焦点をあてることが考えられるようになってきた。それゆえ、人間と環境からなるエコシステム状況は、誰の視点から意味づけし解釈するかまでを考慮する必要性が出てきたのである。特にエンパワメント実践などの利用者の知を活かすソーシャルワーク支援では、利用者とソーシャルワーカーの対話により、人間と環境の支援枠組みに利用者の認識をとおして意味を与え、課題解決やエンパワメントを図る必要がある。このように生活を構造・機能・意味の3側面から理解することが、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践で生活を捉えていくためには必要不可欠となる。

2. エンパワメント実践を展開する支援概念

次に支援概念については、エンパワメント実践を展開するソーシャルワーカーが利用者との関係性を考慮し、協働関係を構築していくことが重視されている。そのためには、利用者を自らの生活を最もよく知り判断できる主体者として尊重し、利用者自身の言葉で語る生活状況を受け入れることが必要となる。エンパワメント実践では、このような利用者とソーシャルワーカーの協働関係を重視しなければならない。

この協働関係については、アメリカにおけるエンパワメントの伝統が、1890年代から存在すると主張するSimon (1994) によって、実践家と利用者との間で形成する協働関係こそがエンパワメントを志向するソーシャルワークの本質であると述べられている。そこでは、協働が単なる協力関係ではなく、Reynolds, B.のいう同盟関係に近いとされ、3つの要素に整理されている。具体的には、①問題に直面する利用者の緊迫感を分かちあうこと、②可能な限り民主的な手段で問題解決に共同参加すること、③社会階級、人種、生活機会

や教育などのお互いの差異に着目しながらも、共通な人間性を強調した分かちあいをワーカーによって始めることである。この関係では【利用者に対して尊重・貢献する姿勢で取り組む】という特性が示されているといえよう。そして【利用者主導でワーカーの支援を統制する】ことがEarlyら（2000）によっても理解されている。そこでの協働とは、利用者と共に状況、希望する結果、そしてゴールの追究や結果を生み出す方法へのアイデアに関する彼女、もしくは彼の定義を分かちあうことから始まるのである。

また【パートナーシップ関係によりパワーを共有し、協働する】については、エンパワメント・アプローチを提唱したLee（2001）が、エンパワメントが相互依存、相互関係、分かちあわれたパワー、分かちあわれた努力を包含する協働関係に依拠していると指摘する点にもみることができる。この点についてはMileyら（2007）も、協働を利用者とソーシャルワーカーが相互に資源を提供しあうことで変化を促す過程としている。それはパワーを共有していく関係で展開され、利用者が自らの経験について専門的知識（expertise）をもたらし、他方でソーシャルワーカーが専門的介入の過程についての専門的知識（expertise）をもたらしながら、両者の専門性を認め、相互に活かすことで成り立っていく。ここでいう利用者の専門的知識とは、彼の生活問題への認識と生きてきた経験やストレングスに基づいた解決策などである。またソーシャルワーカーの専門的知識とは、生活状況を理解するためのエコシステム視座から得るものであり、エンパワメントを促進する支援過程の展開方法に他ならない。

以上のような協働関係に関してperspectiveをふまえて考察していくと、まずエコシステム視座では、人間と環境の交互作用に着目する、いわば生活における関係性を把握することに利点がある。システム思考による構造と機能という記述や説明方法がより説得力をもち、生活の実像をそのままトータルに把握、観察できるアイデアといえる。

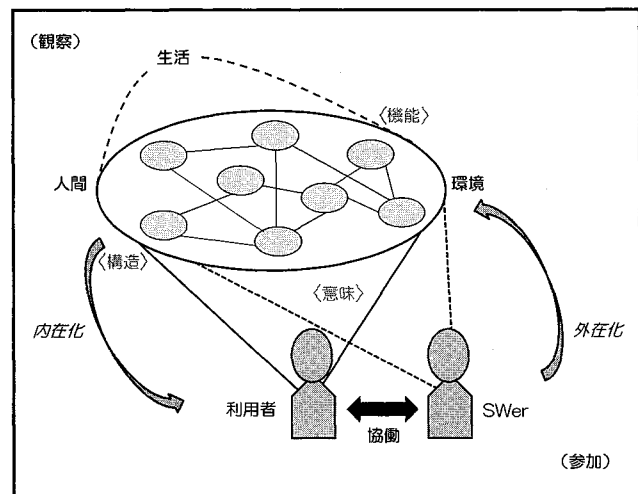


図2 利用者とワーカーによる生活の協働構成

他方、社会構成主義的見解からは、利用者とソーシャルワーカーの参加と関係性を通じて生活を理解し、さらに利用者自身に生活やそのなかのストレングスを自覚することを促す。すなわち人間と環境の交互作用への理解や解釈などの認識を把握しようとする点に特徴がある。これらを利用者の生活理解に応用することで、利用者とソーシャルワーカーによる関係を通じて、利用者生活を人間と環境からなるエコシステム状況に外在化し、かつその内在化により生活の協働構成が可能になるといえよう（図2参照）。エンパワメント実践では、利用者が実践の中心となるべき主役であり、その人がもつ生活や問題、そしてストレングスへの認識をソーシャルワーカーと共に自省をとおして確認することから展開していく必要がある。そのためには、協働実践の展開に向けた利用者とソーシャルワーカーとの関係構築が不可欠である。

3. エンパワメント実践を形成する過程概念

最後にエンパワメント実践過程については、前述の通り利用者自身のストレングスを活かした行動変容による成長・変容の過程である。そして利用者とソーシャルワーカーの協働をとおした個々の問題から社会変革までを含めたミクロからマクロまでの実践過程であることを原理・原則より分析してきた。この実践過程を展開するには【利用

者がストレングスに着目し自身と環境を変えていくために行動する】にみることができるよう、まずソーシャルワーカーが利用者のエンパワメントを促進するストレングス視点を理解することが重要である。ストレングス視点によってソーシャルワーカーは、利用者とともに彼の長所やプラス面を発見することから、エンパワメント実践を開始するのである。

またその実践は【利用者の成長・変容に向けて支援過程をとおして協働する】にみることができるといえる。このことは、Mileyら(2007)がソーシャルワーカーの支援だけで展開するのではなく、利用者とともに対話、発見、発達の局面を通じてエンパワメントを促す協働実践過程を強調したことからも理解できる。そしてエンパワメント実践は【利用者個々の問題から社会変革までを視野に入れて実践する】にみられるような、個人から環境的側面までの変革を視野に入れた協働による過程で展開されるのである。このことについては、Gutiérrez(1991)がエンパワメントを個人が自身の生活の改善に向け行動を起こすことができるように、個人的、対人的、政治的なパワーを増していく過程として定義していることから理解できる。

このような過程の特性についてperspectiveをふまえて考察していくと、一方でエコシステム視座は、客体的な状況を認識し、目的遂行を通じた変容過程をミクロからマクロまでをとおして時系列に捉える点に優れ、他方で社会構成主義的見解は、その状況認識への意味づけの差異に着目し、新たな価値と意味の生成を行う自省作用を通じた認識の転換過程を理解できる点が優位である。エンパワメント実践は、利用者の自らに働きかける自省的作用による過程と環境に働きかける機能的な作用による過程との2側面の特徴を保持しているといえる。

さらに解説すれば、自省的作用は利用者がストレングスを意識化していくように、個々の生活経験を問い直しながら人々の関係性とその相互作用

から新たな意味生成過程を構成する。またそれを通じて環境に働きかける人間の機能は、時系列な状況変容過程という流れでとらえていくことができる。こうした発想は、生態学的に時系列の生活状況を成長・変容の過程として把握することにより可能となる。この点については、Adams(2008)も実践におけるエンパワメントが省察・行為・評価という連続的な内外の循環であり、思考と行動の相互作用であることを指摘している。このように意味生成過程と状況変容過程は相互に関連し、新たな意味を生み出しながら状況を変容させていくのである。このことは、エンパワメントの原理・原則にみられる過程のカテゴリーを理論的に説明しているといえよう。

以上のようにエコシステム視座と社会構成主義的見解に基づく、エンパワメント実践過程は、意味生成過程と状況変容過程の側面から次の4つの要素を保持していることが理解できる。

- ①内在化された抑圧への意識を高めること(環境からの影響の自省的な理解)
- ②独自の意味生成からストレングスを認識すること(自身の強さの自省的な理解)
- ③パワーを外在化し発揮すること(環境に働きかける機能)
- ④マクロな社会変革まで挑戦すること(機能による社会構造の変革)

V. おわりに

ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践を展開するためには、まず利用者側面からの生活の構成を問うことになる。それは、社会構成主義的見解にみられる利用者の知を重視することに他ならない。この利用者個々に固有なものであり、他者からは接近困難な生活世界に関して、いくらかでも理解可能にするために、ソーシャルワークではその独自の専門性を活かす人間と環境の相互作用をとらえるエコシステム視座が適用されている。

そしてその具体化のためには、利用者とのソーシャ

ルワーカーの協働が必要で、その生活支援はその人自身によるエンパワメントを志向し、展開されるのである。このことは、生活における関係性をトータルに把握できるエコシステム視座というアイデアのみならず、社会構成主義的見解により、従来の利用者とソーシャルワーカー関係を問い直し、利用者をソーシャルワークにおける主体者として位置づけ、両者の関係を基軸とした協働による実践過程が重要であることを示している。

そしてその過程は、エコシステム視座に特徴的な環境を考慮し、個人の問題解決というミクロから社会問題の改善というマクロまでの状況変容過程を範囲とする。そしてそこでは、社会構成主義的見解で重視される利用者自身による自省をとおしてストレングスを意識化し、環境に働きかけるパワーにより行動することを通じて環境を変えていく過程にソーシャルワーカーが支援を通じて関わっていくことになる。

このようにソーシャルワークにおけるエンパワメント実践が、ソーシャルワークという生活支援過程のなかで独自のアプローチとして展開されるためには以上のような基本特性をまず理解することが必要である。そして理論的背景となるperspectiveとしてのエコシステム視座と社会構成主義的見解からその枠組みを示し、理論に基づく実践展開がなされなければならない。本論では、エンパワメント実践における生活支援過程という基本特性を明らかにし、理論的背景としてのperspectiveにより考察してきた。これをふまえて今後は、さらにエンパワメント実践過程の精緻化を進めていきたい。

本研究は、文部科学省平成22～24年度科学研究費補助金（課題番号：22730439）を受けて実施した研究成果の一部である。

- 1 Richmond (1922) は、ケースワークを人間と社会環境の間を個々に応じて意識的に調整することにより、パーソナリティを発達させる過程として定義した。
- 2 Hollis (1964) は、ケースワークを心理社会的治療の方法である。それは、機能不全に関する内的な心理的要因と外的な社会的要因との両方を分析し、個人がそのニーズを十分に満たし、社会関係の中でより適応的に機能できるようにする試みであると指摘した。
- 3 Smalley (1967) は、ソーシャル・ケースワークとは、クライアント自身と社会全般の福祉に向けてソーシャル・サービスを利用する際に、本質的には1対1の関係の過程をとおしてクライアントに関与する1つの方法であると定義した。
- 4 Parlman (=1979) は、ソーシャル・ケースワークを、人びとが社会的に機能するあいだにおこる問題をより効果的に解決することを助けるために福祉機関によって用いられるある過程であると定義した。
- 5 Pincusら (=1980) は、ソーシャル・ワークを次のように定義した。人びとと、人びとが生活課題を達成し、苦痛を軽減し、抱負と価値を実現する力に影響を及ぼしている社会環境との相互作用を問題にする。したがって、ソーシャル・ワークの目的は、次のようになる。
 - (1) 人びとの問題解決と対処の能力を強める。
 - (2) 人びとと、人びとに資源、サービス、機会を提供するシステムとを結びつける。
 - (3) これらのシステムの有効な、人間らしい運用を促進する。
 - (4) 社会政策の発達と改善に貢献する。
- 6 Germainら (2008) は、生態学のメタファーについてソーシャルワーク専門職が人々を支援し、社会生活機能における人間の成長、健

康, 満足を支える応答性の高い環境を促進するという社会的な目的を規定すると指摘する。そしてそれに基づく生活モデル実践の特徴を次の10点から整理している。

- (1) 個人, 家族, グループ, コミュニティと
の実践と, 組織的・政治的な権利擁護を含
んだ専門職の機能
- (2) 倫理的実践
- (3) 多様性に感受性を持ち熟練した実践
- (4) エンパワメントや社会正義への実践
- (5) 統合された様式や方法, 技術
- (6) パートナースhipとしてみなされる利用
者とワーカーの関係
- (7) 取り組みのあらゆる側面や, ライフストー
リー, アセスメントに関する利用者とワー
カーとの合意
- (8) 個人や集団のストレングス, ならびに利
用者の行為や決定への焦点化
- (9) 社会的・物理的環境や文化の重要性の浸
透
- (10) 実践の評価と知識への貢献

- 7 中村 (2010) は, ソーシャルワークを解説す
るにあたって, IFSWの国際定義が理念的に
説明されているため具体的な理解が難しい一
方で, 実践の内容と特徴がイメージできる太
田の定義を採用している。そこでは, 太田が
わが国のソーシャルワーク研究の第一人者で
あり, 定義だけでなくその解説を詳細に行っ
ていることが指摘されており, 本稿もこれに
従って採用している。
- 8 Manning, S.の実践原則については, 態度・
関係・ソーシャルワークの役割に分類されて
いるため, 「Manning態度①」のように記述
する。

文献:

- Adams, R. (2003) *Social Work and Empowerment*, Palgrave Macmillan.
- Adams, R. (2008) *Empowerment, Participation*

and Social Work, Palgrave Macmillan.

- Andrus, G. (1998) *Empowerment Practice with Homeless People or Families*, Gutiérrez, L. M., Cox, E. O. and Parsons, R. J., *Empowerment in Social Work Practice : A Sourcebook*, Cole Publishing Company. (= 2000, 吉川かおり訳「第7章 ホームレスの人々と家族へのエンパワメント実践」小松源助監訳『ソーシャルワーク実践におけるエンパワメントーその理論と実際の論考集ー』相川書房, 143-172.)
- 安梅勅江 (2004) 『エンパワメントのケア科学ー当事者主体のチームワーク・ケアの技法ー』医歯薬出版。
- Dubois, B. and Miley, K.K. (2008) *Social Work : An Empowering Profession*, Allyn and Bacon.
- Early, T.J. and GlenMaye, L. F. (2000) *Valuing Families : Social Work Practice with Families from a Strengths Perspective*, *Social Work*, 45(2), 118-130.
- Germain, C. B. and Gitterman, A. (2008) *The Life Model of Social Work Practice*, Columbia University Press.
- GlenMaye, L. F. (1998) *Empowerment of Women*, Gutiérrez, L. M., Cox, E. O. and Parsons, R. J., *Empowerment in Social Work Practice : A Sourcebook*, Cole Publishing Company. (= 2000, 中野恵美子訳「第2章 女性のエンパワメント」小松源助監訳『ソーシャルワーク実践におけるエンパワメントーその理論と実際の論考集ー』相川書房, 33-64.)
- Gutiérrez, L. M. (1991) *Empowering Women of Color : A Feminist Model*, Bricker-Jenkins, M., Hooyman, N. R. and Gottlieb, N. eds. (1991) *Feminist Social Work Practice in Clinical Settings*, Sage Publications, 119-214.
- Hollis, F. (1964) *Casework : A Psychosocial*

- Therapy*, Random House.
- Kirst-Ashman, K. K. (2000) *Human Behavior, Communities, Organizations, and Groups in the Macro Social Environment : An Empowerment Approach*, Brooks/Cole.
- 国際ソーシャルワーク学校連盟・国際ソーシャルワーカー連盟・社団法人日本社会福祉教育学校連盟 (2009) 『ソーシャルワークの定義 ソーシャルワークの倫理：原理についての表明 ソーシャルワークの教育・養成に関する世界基準』相川書房.
- 小松源助 (1995) 「ソーシャルワーク実践におけるエンパワメント・アプローチの動向と課題」『ソーシャルワーク研究』21 (2), 相川書房, 76-81.
- Lee, J. A. B. (2001) *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press.
- Manning, S. S. (1998) *Empowerment in Mental Health Programs : Listening to the Voices*, Gutiérrez, L. M., Cox, E. O. and Parsons, R. J., *Empowerment in Social Work Practice : A Sourcebook*, Cole Publishing Company. (=2000, 小野景子訳「第6章 精神保健プログラムにおけるエンパワメント―声を傾聴する―」小松源助監訳『ソーシャルワーク実践におけるエンパワメント―その理論と実際の論考集―』相川書房, 115-141.)
- Miley, K. K., O'Melia, M. and Dubois, B. L. (2007) *Generalist Social Work Practice : An Empowering Approach*, Allyn and Bacon.
- 中村佐織 (2010) 「ソーシャルワークとは何か」『総合リハビリテーション』38 (9), 医学書院, 849-854.
- 西梅幸治 (2010) 「エンパワメント実践における perspective 特性の検討―エコシステムと社会構成主義に焦点化して―」『高知女子大学紀要』60, 65-82.
- 太田義弘編 (1999) 『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規.
- 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著 (2005) 『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング―利用者参加へのコンピュータ支援―』中央法規.
- 太田義弘 (2008) 「社会福祉政策からソーシャルワークへ―建前としての社会福祉と本音のソーシャルワーク―」『関西福祉科学大学紀要』11, 107-122.
- 太田義弘編著 (2009) 『ソーシャルワーク実践と支援科学―理論・方法・支援ツール・生活支援過程―』相川書房.
- Perlman, H. H. (1957) *Social Casework : A Problem-solving Process*, The University of Chicago Press. (=1979, 松本武子訳『ソーシャル・ケースワーク―問題解決の過程―』全国社会福祉協議会.
- Pincus, A. and Minahan, A. (1977) A Model for Social Work Practice, Specht, H. and Vickery, A. eds. *Integrating Social Work Methods*, George Allen & Unwin Ltd. (=1980, 岡村重夫・小松源助監修訳「第5章 ソーシャル・ワーク実践のモデル」『社会福祉実践方法の統合化』ミネルヴァ書房, 87-142.)
- Richmond, M. E. (1922) *What Is Social Case Work? : An Introductory Description*, Russel Sage Foundation.
- 齊藤順子 (1997) 「エンパワメント実践と教育方法の課題―エンパワメント実践の特質をふまえて―」『ソーシャルワーク研究』23 (2), 相川書房, 128-134.
- Simon, B. L. (1994) *The Empowerment Tradition American Social Work*, Columbia University Press.
- Smalley, R. E. (1967) *Theory for Social Work Practice*, Columbia University Press.
- Staples, L. H. (1999) *Consumer Empowerment in a Mental Health System : Stakeholder roles and Responsibilities*, Shera, W. and Wells, L. M., *Empowerment Practice in*

Social Work, Canadian Scholar's Press Inc.,
119-141.

Wise, J. B. (2005) *Empowerment Practice
With Families In Distress*, Columbia
University Press.

Woodrow, R. D. (1983) Casework : A
Psychosocial therapy, Meyer, C. H. ed.,
*Clinical Social Work in the Eco-systems
Perspective*, Columbia University Press.